

博士論文要旨

大正期の社会科学と科学主義をめぐる思想史的研究

立命館大学大学院文学研究科
人文学専攻博士課程後期課程

いのらはら とおる
猪原 透

【本論文の構成】

序章

- 一．対象と目的
- 二．熱力学と社会科学
- 三．研究の「科学性」に関する自己理解を記述すること
- 四．「社会の発見」と科学的な統治

第一章 予備的考察—科学的世界観の問題と大正期の社会科学

第一節 明治期の社会科学と「社会学的視線」について

- 一．「社会」概念史における二つの系譜
- 二．社会学的視線と社会防衛主義
- 三．要素への分解と決定論的世界観

第二節 日露戦後の社会科学と能動的認識論

- 一．社会構造の変容と科学思想
- 二．文学者の「醒めた夢」
- 三．社会科学における要素還元主義批判と新しい認識論——優生学の転換を事例として

第二章 大正期の刑法学における科学主義について——牧野英一を中心に はじめに

第一節 牧野刑法学の概要と先行する諸学説との関係

- 一．無過失責任論
- 二．エネルギー一元論
- 三．刑事人類学

第二節 科学と実証主義

第三節 判例研究における「常識」と「科学」

おわりに

第三章 大正期社会思想史における米田庄太郎——エネルギー一元論への評価を中心に はじめに

第一節 エネルギーをめぐる思想史と米田社会学

- 一．世紀転換期の熱力学と日本
- 二．エネルギー一元論と米田庄太郎

第二節 日露戦後の社会問題と米田社会学

- 一．米田における社会像の変遷
- 二．「智識階級」と社会学

おわりに

第四章 文化価値と生存権——左右田喜一郎と福田徳三

はじめに

第一節 「貨幣と価値」から「文化主義」まで

- 一．文化主義
- 二．『貨幣と価値』
- 三．数量的普遍と超越的普遍

第二節 福田徳三における解釈としての社会政策

- 一．アプリアリ論争
- 二．社会と生存権

おわりに

終章

- 一．本論文の検討を通して何が見えたか
- 二．科学的世界観の外部にあるもの

【全体の要旨】

本論文は大正期の社会科学を主たる対象として、彼らの学問的営為において社会科学の方法や役割、社会のなかでの科学の位置づけといった認識論的な関心がいかなる役割を果たしたのかを分析し、それによって彼らの思想史的な位置づけを明らかにすることを課題とするものである。扱われる史料は主に日露戦後から 1920 年代までに書かれたものを対象とするが、予備的検討として、明治初期に書かれたものについても若干の分析を行っている。

社会科学における認識論を扱ううえで、本研究では同時代の自然科学との交渉を重視した。通説的な社会科学史像において大正期は、人文・社会科学と自然科学の対比を強調する新カント派哲学との関連においてしばしば語られ、物理学や熱力学との関連において語られることは稀である。確かに、大正期には自然科学の万能視に対する懐疑的な見方が広がり、それを土壌として新カント派哲学が広範な影響を与えたことは疑い得ない。しかしその一方で、同時代の

自然科学の展開のなかに社会科学の新しい可能性を見出し、自然科学と社会科学の対比に対して否定的な態度をとった社会学者も少なからず存在したのである。彼らの存在を度外視するとき、大正期の社会科学像は極めて平坦なものになるであろう。

こうした問題関心を背景として、本論文では、エルンスト・マッハの科学思想(マッハ主義)と、それに触発されたエネルギー一元論とが、日本の社会科学においてどのように受容され、その過程で如何なる変容が生じたのかに注目した。マッハについては、レーニンの『唯物論と経験批判論』における主要な批判対象であったことが知られている程度であり、最近までは「忘れられた思想家」というべき存在であった。しかしその同時代的な影響力は大きく、近年では再評価が進められている。本論文では日本におけるマッハ受容の諸相を取り上げ、その広範な影響を明らかにした。

具体的な叙述としては、第一章で明治期の社会科学における認識論の分析を全体の予備作業として行い、第二章から第四章にかけてはそれぞれ、牧野英一(刑法学)、米田庄太郎(社会学)、左右田喜一郎・福田徳三(経済学)といった大正期の代表的な社会学者を取り上げ、彼らの認識論と自然科学の関連について分析している。

【各章の要旨】

序章では、大正期における知的流動性という観点から、これまでの社会科学史研究が自然科学と社会科学の分離を前提とすることで、分析対象に偏りを生じさせていることを指摘した。

一般的な社会科学史の理解において大正期は、(1)社会科学から「社会現象もまた自然現象の一部である」という意味での存在論的な様相が取り除かれるとともに、(2)1930年代におけるマルクス主義科学と統制経済論という二つの設計主義的な社会理論の前提となったこと、以上の二点において重要な時期であると考えられている。こうした通説的理解から抜け落ちるのは、大正期における「科学主義」と呼ぶべき社会学者の熱心な科学受容と、これと並行して生じた科学それ自体の価値に対する問い直しという思想動向である。

こうした思想動向を視野に入れたとき、従来は総力戦体制期に特有の思想として論じられてきた次の傾向が、大正期の社会科学からの連続として見る事が可能になる。その特徴とはすなわち、社会学者が自らの学問的営為のもつ意味を考え、また自らの営為を社会構造のなかに位置付けようとする傾向(いわゆる再帰性)である。こうした傾向は、マッハ主義に象徴される同時代の自然科学思想の展開とも無関係ではないことを論じた。

第一章では、全体の予備作業として明治初期から日露戦前までの社会科学を取り上げ、それらが暗黙のうちに前提としていたニュートン力学的な世界観からの影響を「社会学的視線」と名付けたうえで抽出した。

具体的には、スペンサー社会学の受容を媒介として、明治初期の「社会」概念に込められていた規範的含意が取り除かれ、「原因—結果」(すなわち「社会現象」)の束として「社会」を捉える認識が広がっていく過程を論じた。このような古典物理学をモデルとした認識論は、一方で天賦人權論に基づく急進的な民権運動に対しては、原因—結果の観察という「科学」を強

調することによって天賦人權論の非科学性を批判し、他方で復古あるいは反欧化思想に対しては、表面的な観察からは気づかれない進化「法則」を強調することによって、社会の漸進的な改良を促す試みであった。さらに、政治と社会の二元論的対立を前提とせず、政治の基礎として社会＝アソシエーションを捉える「社会」言説に対しては、社会を自立的な原因—結果の連関と法則をもった存在として捉え、政治を社会への介入とみなす点で対立していた。

こうした認識論は、明治10年代から30年代にかけて社会学・法学・文学など広範な領域に広がっていくが、それが頂点に達すると同時に動揺にさらされていく。本章の後半では、上記の認識論の動揺を導いた要因として「個人の析出」「国家的価値の相対化」「社会の発見」を挙げ、自然科学の価値の自明性が薄れるとともに、認識主体としての個人が前景化し、それによって自然科学の方法の問い直しが様々な形で行われたことを論じた。その具体例として日露戦後における文学や文学評論に触れるとともに、社会事業学者・海野幸徳の軌跡を通して認識論の変容を分析した。

第二章では、先述した再帰的な社会科学思想と自然科学の交点、あるいは実践例として、刑法学者・牧野英一を取り上げた。従来、牧野刑法学における科学主義的な傾向については、正規転換期にかけての風潮の産物としてごく簡単に言及されるだけであったが、本章では牧野の認識論上の問題意識に遡って再検討することによって、牧野が「科学的な方法」を強調することの背景には、個人と社会、唯心論と唯物論、理想主義と客観主義といった対立の克服という企図が存在することを明らかにした。

本章の前半では、牧野刑法学を理解するうえでのキーワードとして「無過失責任論」「エネルギー一元論」「刑事人類学」の三点を論じた。これらに共通するのは存在と当為の連続性という観念であり、その観念は刑法学そのものの在り方に対しても向けられていた。すなわち現在の「科学的な刑法学」の暫定的・相対的な性格と、その限りにおいての有用性の承認である。こうした発想は、科学性の基準を真偽の絶対的区別ではなく相対的な有用性に求めたマッハ主義の立場とも共通するものであった。本章の後半では、上記の発想が具体化された例として、刑事人類学に向けられた批判に対する牧野の反論や、これまでほとんど論じられてこなかった「判例研究」の社会科学史的な位置づけを論じた。

第三章では、大正期の代表的な社会学者・米田庄太郎を取り上げた。米田の活動はきわめて多方面にわたっているが、本稿では、米田における「エネルギー一元論」の受容を参照軸とすることで、彼の思想を総合的に把握することを試みた。加えて、その予備的作業として日本における「エネルギーの思想史」についても、その概要の検討を行った。

米田のなかでエネルギー一元論に対する評価は大きく変化しているが、それは必ずしも全肯定あるいは全否定として処理できるものではなく、むしろ当時の社会に対する危機意識（たとえば都市化・資本主義化の弊害）の深まりとともにその位置づけが変化していくというものであった。当初は社会科学のもつ実践性を担保するものとして好意的に評されたが、のちには、こうした実践性はより高次の理念によって制御されない限り、むしろ社会の危機を加速させるのではないかと考えるに至った。それは大きな変化である一方、他方では「社会科学が実践

的であるためには如何にあるべきか」という問題関心の持続を示すものでもあった。

こうした変化と持続の関係は、米田が大正期の後半に提唱する「労働者文化」論の理解に対しても示唆を与えてくれる。米田によれば、認識の目的は実践にあり、実践から認識が生じるとするエネルギー一元論のような立場は、ブルジョア文化のもとで行われる自己目的化した営利追求を認識論の側面から表すものであり、ブルジョア文化の弊害に対してなんら為すところがない。これに対して労働者文化の形成とは、階級対立や国家批判の称揚を意味するのではなく、労働に伴う経験や労働組合が、社会連帯やコスモポリタニズムといった普遍的理念の基礎となることを意味しており、これが実現することで上記の問題は克服される、と主張された。すなわち、米田はエネルギー一元論における科学的認識の実践的価値という問題構成を一貫して保持しながらも、大正期において「階級闘争」が経済のみならず精神的・文化的問題としても顕在化していく状況に対応して、「労働者文化」の形成を社会学の主要な課題とするに至ったということである。

第四章では、経済学者・福田徳三と、経済哲学者・左右田喜一郎を取り上げた。彼らの議論を通して、大正期において個人の総和に還元されない「社会」の存在が広く認識されるとともに、分業や個人主義を前提としたうえでいかに個人と社会を結びつけるか、そのための条件をどのように整備するかについて、様々な形で構想されていたことを論じた。特に福田の思想は、こうした諸構想のひとつとして位置づけられると同時に、規範的に再構成された「生存権」概念を中核とし、この規範を社会全体へ浸透させるための社会組織の制度化として展開された点に特色があることが明らかとなった。

本論文では新カント派哲学との関わりを中心に論じられてきた従来の社会科学史に対し、そこから零れ落ちる自然科学との関連を重点的に取り上げてきた。それに対して本章では、左右田喜一郎を題材として、自然科学と社会科学の交渉を促したのと同じ問題意識を、新カント派哲学のなかに探ることを試みた。具体的には、単なる数の集合ではない「多数」や「群衆」を認識論的に如何に位置付けるか、という問題意識の展開である。福田の思想についてもその延長線上に位置づけられることが、新カント派哲学と相対性理論の同居という形で示されている。

経済も人間も孤立した断片として存在するのではなく、常に他の要素との連関のなかにあり、そうした連関が織りなす全体の一部としてしか捉えられない。このような意味での全体論を彼らは志向するとともに、それはまた、認識論の変革が国家—社会関係の変革と分かちがたく結びついているという点で、決定論とも対立するものであったことを明らかにした。

終章ではまず内容の要約を行い、本論文で取り上げた諸思想の意義および問題点を指摘した。その問題点のひとつとして、思想の自己完結的性格を指摘するとともに、そのオルタナティブとして大正期のマルクス主義を取り上げた。大正から昭和初期のマルクス主義においては、平林初之輔のような認識論的にはマッハ寄りの人物もいたが、全体としてはレーニンの影響のもと、反マッハの風潮が強かった。終章ではそれを、自己完結的な社会

科学に対する「外部」からの反撃として位置付けた。

具体的には、石原純による相対性理論およびマッハ主義の紹介論文を契機として生じた、河上肇・福本和夫の認識論に関する論争を取り上げた。この論争に関する分析により、大正期後半から昭和初期にかけての「福本イズム」の隆盛と唯物弁証法の位置づけについて、同時代の思想動向との関連をもとに再検討する余地があることを指摘した。

【成果の要約】

本論文では大正期の社会学者を素材として、彼らが熱力学と社会科学の関係、要素と全体、自然法則と社会的理想の関係など広い意味での科学論がいかに展開されたかを検討した。これらは新知識への単なる好奇心の発露として片づけられるようなものではなく、資本主義の浸透や大衆社会化といった社会構造上の変動、国家的価値の下落と社会進化に対する懐疑的意識といった思想上の変動、そして明治以降の社会科学が暗黙の裡に前提としてきたニュートン力学的な世界観の動揺といった諸問題への誠実な対応として、現在でも顧みるに値する内容を多く含んでいるように思われる。

以上の検討を経て、本論文の結論として提起するのは以下の二点である。第一に、大正期社会科学の思想史的な位置づけについて。従来の研究が、明治の社会進化論から大正の新カント派、昭和のマルクス主義へという展開を「社会科学の脱自然化」の過程と重ね合わせる形で理解してきたことは、他方で自然科学と密接に結びついた実証主義などの方法論的側面、さらには自然科学に基づく世界観が明治以降どのように展開したのかという問題を閑却させることになった。本論文で取り上げた牧野や米田に対しても、これまで少なからずその思想に関する検討が行われてきたが、その中においても、彼らがそれぞれの専門分野のなかで自然科学の動向に言及し、それを通して社会科学の方法論の構築を試みていたことの意味が十分に引き上げられてきたとは言えないように思われる。本論文ではそうした研究状況に対し、彼らの方法論的な議論の分析を通して、その背後に横たわる大正期の社会状況への問題意識を読み解くことを試みた。そこで明らかになったことは、彼らの思想が自然科学的な世界観の枠内において、労働問題、民本主義運動の高揚、個人主義化、社会統合に関する問題の解決を図るものであった、ということである。

第二に、大正期における社会科学の方法論的な転回がなぜ・どのように生じたのかについて。この点に関して本研究が明らかにしようと試みたのは、自然科学の変容を受けとめつつ行われた社会科学の転回が、大正期の社会状況によって様々に要請された結果であったということである。その社会状況とはすなわち、国際的な経済競争に耐え得る「経済的な＝能率的な」国民を育成すること、社会分業や個人化を前提として、それに根差した統治へと転換すること、労働問題や神経症といった近代化・都市化の弊害に対して、反近代とは異なる立場から対処すること、以上の点においてである。

むろん、こうした社会科学と自然科学の結合には様々な問題点が伴われた。ここではその主要なものとして、以下の二点を挙げておく。第一に、科学と価値論の結合をもって社

会政策の基礎とする彼らの意図が、ともすれば国家の権威的な正統性を補完するものになりかねない、という点である。その意図が実現された場合、社会政策は科学的であり、しかも「正しい」ものだ、ということになるのだから、おのずから抑圧的な性格を持つことになるだろう。

第二に、その自己完結的な性格に関する点である。新しい科学的世界観、社会科学思想においては、社会と社会科学が相互依存的な関係を築きながら、両者が緩やかに進化＝経済性の向上を果たしていく、という未来が想定されている。この場合、社会科学にとっては社会が、社会にとっては社会科学が自らの内部的要素として組み込まれており、その「外部」の存在は周到に排除されているのである。こうした視点から見たとき、本論文で論じた人々がなぜマルクス主義と厳しく対立しなければならなかったのか、という問題についても一定の示唆を得ることができる。唯物弁証法が受容される大正期から昭和初期にかけて、マルクス主義における「労働」とはまさに「外部」に存在する自然への働きかけであるからだ。

以上のような問題性はまた、大正期の社会科学と昭和期の総力戦体制論がどのように連続しているのかを考えるうえでも重要な視座を与えてくれると考えられる。

【主要参考文献】

※本論文中で史料として用いたものは除く。

秋元律郎『日本社会学史—形成過程と思想構造—』（早稲田大学出版部、1979年）

有馬学『「国際化」の中の帝国日本』（中央公論新社、1999年）

飯田泰三「吉野作造—ナショナルデモクラットと「社会の発見」1980年『批判精神の航跡』（筑摩書房、1997年）

石井幸夫「生殖の文法—ある生殖意識変革運動の言説編成について—」佐藤慶幸他編『市民社会と批判的公共性』（文眞堂、2003年）

石井幸夫「優生学の作動形式—永井潜の言説について—」酒井泰斗他編『概念分析の社会学』（ナカニシヤ出版、2009年）

石田雄『日本の社会科学』1984年（東京大学出版会、2013年）

伊藤孝夫『大正デモクラシー期の法と社会』（京都大学学術出版会、2000年）

エルンスト・マッハ『感覚の分析』（須藤吾之助・廣松渉訳、法政大学出版局、1971年）

堅田剛『独逸法学の受容過程』（御茶の水書房、2010年）

金子務『アインシュタイン・ショック（1・2）』（河出書房新社、1981年）

川本三郎『大正幻影』1990年（岩波書店、2008年）

木田元『マッハとニーチェ』2002年（講談社、2014年）

木村直恵「明六社「ソサイチー」・社交・アソシエーション実践——明治期における「社会」概念編成の歴史的考察（前篇・後篇）」『学習院女子大学紀要』15号・16号（2013年～2014年）

木村直恵「「社会学」と出会ったときに人々が出会っていたもの」『現代思想』42 卷 16 号(2014 年)

黒川みどり『共同性の復権』(信山社、2000 年)

小西甚一『日本文学原論』(笠間書院、2009 年)

小山慶太『漱石が見た物理学』(中央公論社、1991 年)

塩野谷祐一『経済と倫理』(東京大学出版会、2002 年)

佐藤達哉『日本における心理学の受容と展開』(北大路書房、2002 年)

清水太郎「大正・昭和思想史の「見失われた環」」『現代思想』21 卷第 7 号・9 号(1993 年)

清水太郎「カント学派哲学と大正期日本の哲学 西田幾多郎と左右田喜一郎」『現代思想』22 卷第 4 号(1994 年)

鈴木貞美「エネルギーの文化史へ——概念変容をめぐる覚書」金子務・鈴木貞美編『エネルギーを考える』(作品社、2013 年)

芹沢一也『〈法〉から解放される権力』(新曜社、2001 年)

大道安次郎『日本社会学の形成』(ミネルヴァ書房、1968 年)

田中希生『精神の歴史』(有志舎、2009 年)

銅直勇「米田庄太郎博士の「純正社会学」」1964 年『銅直勇著作集』(めいせい出版、1977 年)

中久郎『米田庄太郎』(東信堂、2001 年)

中村邦光・板倉聖宣『日本における近代科学の形成過程』(多賀出版、2011 年)

中山研一「牧野英一の刑法理論」吉川経夫・他編『刑法理論史の総合的研究』(日本評論社、1994 年)

橋本努「左右田喜一郎一真・善・美にならぶ貨幣」鈴木信雄編『日本の経済思想二』(日本経済評論社、2006 年)

浜口晴彦「日本社会学の形成と定位」児玉幹夫編『社会学史の展開』(学文社、1993 年)

平松義郎『近世刑事訴訟法の研究』(創文社、1960 年)

船山信一『日本の観念論者』1956 年『船山信一著作集』第 8 卷(こぶし書房、1998 年)

松永寛明『刑罰と観衆』(昭和堂、2008 年)

松本三之介「近代日本における社会進化思想(二)」『駿河台法学』第 11 卷第 2 号(1998 年)

水本浩・平井一雄編『日本民法学史・通史』(信山社、1997 年)

三谷太一郎『大正デモクラシー論』(中央公論社、1974 年)

宮島英明「近代日本における“社会政策的自由主義”の展開—福田徳三の「生存権論」の史的分析」『史学雑誌』第 92 卷第 12 号(1983 年)

山下重一『スペンサーと日本近代』(御茶の水書房、1983 年)

山室信一「日本学問の持続と転回」松本三之介・山室信一編『日本近代思想大系 10 学問と知識人』(岩波書店、1988 年)